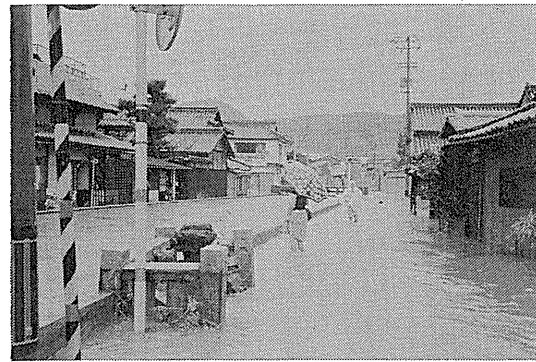


第五節 自然災害

香川県気象史料によると、四一六年（允恭天皇五年）から明治三十三年（一九〇〇）までの災害は暴風雨が最も多く、ついで旱害・地震・大雨などが多い。また明治三十四年（一九〇一）から一〇年間ごとの

明治34年（1901）以後の災害件数

種別	年代						
	1901 1910	1911 1920	1921 1930	1931 1940	1941 1950	1951 1960	1961 1970
台風	6	20	7	9	13	21	19
旱害	2	1	2	3	2	1	1
大雨	2	0	0	1	4	16	7
雷	7	22	5	4	6	12	6
大雪	1	1	1	1	2	7	4
強風	5	9	5	10	9	48	10
濃霧	1	0	1	2	2	11	80



風水害（昭和58年）

主な災害は上表に示してあるが、強風や台風、雷雨などが多く、旱害・大雪などは少ない。旱害が少ないのは、農業水利の開発が進んで、八月の渇水期に灌漑用水の不足することが余り目立たなくなったのである。昭和二十一年（一九四六）十二月二十一日の南海地震は、地盤沈下や海水浸入、湛水地域の拡大、排水不良など長期にわたって被害を及ぼした。気候災害として、最も頻度が

高く被害の大きいものは台風による豪雨である。

災害の大きかった最近の例をみると、昭和五十八年（一九八三）の台風一〇号で一時間に三〇メートル以上の強い雨が降り、三日間の総雨量は三〇五・五メートルであった。その緊急対策として桜川水系、弘田川水系に土のう積立三六か所、八六四〇俵土のうを積み上げて決壊の恐れのある場所を中心に堤をかためたが、水量が多く家屋の倒壊二戸、床上浸水一一五戸、床下浸水一九八三戸、田畑の浸水三一五畝、冠水五〇三畝、橋の流出二か所、山の土砂崩れ一〇か所、道路の冠水七五路線、鉄道のモーターポイント取替七五か所に及んだ。